

2025年2月10日
早稲田大学ふくしま浜通り未来創造リサーチセンター事務局

早稲田大学ふくしま浜通り未来創造リサーチセンター
第16回創造的復興研究会
議事録

日時: 2024年12月18日(水) 18:00-20:00

方法: オンライン (Zoom)

出席者: 25名

講演者:

中貝宗治: 一般社団法人・豊岡アートアクション (TAA) ・理事長、兵庫県豊岡市・前市長

討論者:

山本育男: 福島県富岡町・町長

遠藤秀文: 福島再生塾・副塾頭、株式会社ふたば・社長、技術士

工藤尚悟: 国際教養大学国際教養学部・准教授

司会:

林 誠二: 創造的復興研究会・副代表、国立環境研究所福島地域協働研究拠点・研究グループ長

研究会代表:

松岡俊二: 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科・教授

研究会メンバー:

森口祐一: 国立環境研究所・理事

崎田裕子: 環境ジャーナリスト

高橋洋充: 福島東高校・教諭、浪江町

戸川拓哉: 国立環境研究所福島地域協働研究拠点・主任研究員、工学

除本理史: 大阪公立大学

オブザーバー:

猪狩 優: ふたば 株式会社

西巻明美: ふたば 株式会社

岸本 智：ふたば 株式会社
猿田和孝：秋田県五城目町教育委員会・主査
竹原信也：福島県富岡町・副町長
竹下敦宣：日本経済新聞
山田美香：福島大学
Zoe Decarpentrie：早稲田大学 アジア太平洋研究科修士2年生
長沢真路：早稲田大学 学部生

事務局：

永井祐二：早稲田大学環境総合研究センター・研究院教授
李 洋昊：早稲田大学大学院環境・エネルギー研究科 講師
任 羽佳：早稲田大学大学院アジア太平洋研究科・博士課程
Hua Yan：早稲田大学大学院アジア太平洋研究科・博士課程
Lin Weiyi：早稲田大学大学院アジア太平洋研究科・博士課程

議題：

講演(報告内容は報告資料を参照ください)

中貝宗治：大学は町を変えるか：芸術文化観光専門職大学を例として

概要：兵庫県豊岡市は「深さを持った演劇のまちづくり」を進めている。演劇が、観光、教育、介護等様々な分野で役割を果たし、地域に深く根ざすまちを創る作戦だ。2021年には、演劇と観光の両方を学ぶ県立の芸術文化観光専門職大学を誘致した。芸術文化観光専門職大学は、知の拠点としての機能を果たすだけでなく、若い人を呼び込むことにより、まちに活力を与え、雰囲気を一変させた。地域との交流も盛んだ。スタバまでできた。その豊岡市の経験をお話しください。

【質疑・総合討論】

山本：豊岡市の成功例を参考にし、それを富岡にどう活かすか悩んでいる。富岡町は原発事故や日本大震災で人口が激減したが、現在徐々に復興が進んでいる。小さな世界都市を目指して再建を進める中で、最適な復興方法や若い世代の呼び込みが必要だ。現在、この課題について模索している。中貝さんからアドバイスをもらいたい。豊岡市と同じ成功は難しいかもしれないが、似た環境から学ぶ可能性はあると考えている。

中貝：厳しい状況の中で努力されている皆さんに心からエールを送りたい。富岡町は原発事故や震災の影響を乗り越え、復興を進めるには、課題への対応だけでなく、未来の理想像を描くことが大切だと思う。

特に、豊岡市のように小規模で特色ある大学を設立することで、若い世代を引き付け、地

域の推進力とする戦略が有効だと考えている。大都市に多くある一般的な大学とは異なり、富岡町の特性を活かした独自の大学を作ることで、挑戦したい人々を呼び込むことができる。

また、災害を克服した経験を地域の強みに変え、外部の人材を積極的に迎え入れながら、皆で未来の富岡を創り上げる。みんなで知恵を出し合い、戦略を立てて進めることで、多くの人々が共感し参加してくれると信じている。こうした取り組みを通じて、さらに多くの人々が繋がり、地域の発展に寄与してくれると確信している。

山本:富岡町には現在約 2,500 人が暮らし、そのうち 6 割が元々の町民ではない。多様なアイデアや目的を持つ移住者が増え、新しい知恵や視点を活かして今後の夢の町づくりを共に進めたい。

中貝:豊岡市も多様な人々が集まり、新たな価値を生む力となっている。例えば、資生堂のホームページには「ダイバーシティ、エクイティ、インクルージョンで新しい価値を創造します」と記載されて、異なる背景を持つ人々が集まることで新たな価値が生まれることを示している。元々の住民でない人々がもたらす新しい視点は、地域に新たな可能性をもたらす信じている。

遠藤:父が震災当時の富岡町・町長として住民を避難させた経験がある。震災から 13 年 9 ヶ月が経つが、富岡町の住民帰還率は 6% に留まっている。

震災前の主要産業は原発関連産業であったが、廃炉に伴い消滅した。その結果、移住者が増え、地域社会の再生は非常に困難な状況だ。地震、津波、原発事故という複合災害からの復興は前例がなく、日々の行動が地域再生の一歩となっている。

中貝さんの話を聞き、大都市と競争するのは難しいと痛感した。富岡の持つ魅力を一つ一つ磨き、繋げていくことが重要だと考えている。芸術や観光など新しい風を吹き込むことで、地域の魅力を引き出し、若い世代を引き付けることが可能だ。富岡町には既に多くの良いものがあり、それを磨けばさらなる価値が生まれる。

また、海外の ODA 事業の経験から、経済的に恵まれない地域でも、コミュニティの絆や人々の豊かさを感じた。富岡町をゼロから再建することで、日本人が本来大切にすべき地域づくりを実現できると信じている。成熟した町ではなく、まだ成長の余地がある富岡町だからこそ、新しい価値を創造できると考えている。

現在、富岡駅前にワイナリーの建設が進行中で、ボランティア活動も活発だ。多くの人々が集まり、地域の再生に向けた取り組みが進んでいる。芸術家の宮島辰夫さんが美術館建

設を計画するなど、文化的な魅力も加わりつつある。前例のない復興の中で、地域の良さを引き出し、世界に共感される町づくりを進めていきたい。

中貝:先ほどODAの話で触れられた「人間にとて大切なものの」という視点は、福島県浜通りや富岡町でも切実に感じられていると思う。これから「まち」が復興しつつある中で、「まち」の基盤となる価値を再確認することは非常に重要だ。各々の思いを言語化し、「まち」全体として共有することで、前進するための基盤を築いている。

コミュニティが広がりをみせ、ワインの取り組みも外部からの応援が増えていると言うことであった。こうしたことにより、世界に向けて発信していくのではないか。同様に、豊岡市のコウノトリの例は、人間の価値観の再評価がもたらす力を示している。かつて害鳥とされたコウノトリが、今では豊かな環境の象徴となったのは、足元を見直し新たな価値を見出した結果だ。こうした足元の価値を掘り下げる作業は、未来を拓くために欠かせない。

アートとの出会いも幸運だった。豊岡市が世界で突出するには大規模な資源はないが、演劇やソロダンスなど、場所を選ばないアート活動を通じて多様性を受け入れている。小さな町だからこそ、柔軟なアートの取り入れ方が可能である。アートにはさまざまな形があり、街角や原っぱでも実施できるため、多様なアプローチが取れる。

大学のカリキュラムにもアート的要素を組み込むことで、コミュニケーション能力の向上を図る試みもある。平田オリザさんのような演劇を通じて、理系学生のコミュニケーション能力を高める取り組みは参考になる。アートを視野に入れることで、「まち」の発展に多様な視点と柔軟性をもたらすことができる。

工藤:秋田県秋田市の国際教養大学に所属し、五城目町（人口約8,000人）のまちづくりに長年携わってきた。人口減少が進み、小学校は1校に統合されたが、廃校となった馬場目小学校をシェアオフィスとして再利用している取り組みも進んでいる。さらに、美術大学が主導して空き家をアートスペースとして活用し、新たな文化や交流を創出している。例えば、アート展示や地域特産品を題材にした作品が展示され、来訪者同士が自然と交流できる場が増えている。先月までシェアオフィスで大きな布に描かれた岩の絵などの展示が行われ、男鹿半島のハタハタを描いた作品や皮の加工をしている店の展示スペースにもアートが取り入れられている。こうしたアートの取り組みが新しい風を町にもたらしていると感じている。

2年前に「サステナビリティ」をテーマにした本を出版し次世代に何を残すべきかを具体的に考える仕組みづくりの重要性を提唱した。本の中、現世代が次の世代に何を残すべき

かを具体的な仕組みとして形にすることが重要だと考えている。

ご発表について、いくつか質問がある。まず、「小さな世界都市」というビジョンはどのように生まれ、地域に根付かせるためにどのような工夫があったのか。また、町づくりで「深さ」「広さ」「寛容性」「多様性」といった定性的な目標を共有し、住民が同じ方向に向かうためにはどうすればよいか。さらに、卒業生が地域と継続的に関わる仕組みや、中高生との関わりを強化し、若者が地域に残る割合を高める具体策についても意見を聞きたい。

特に中高生との関わりを深め、将来的に地域に戻る若者を増やすことで、持続可能な町づくりを実現したい。大学を中心に都市圏から人口を誘致する一方で、若い世代との接点を増やす方法についても教えてもらいたい。

中貝:私は「小さな世界都市を作る」という心構えを持っている。これは単なるビジョンではなく、世界に通用する価値を磨くための姿勢だと思っている。豊岡市が大都市と競うには、大きさや高さでは勝てない。そのため、足元の自然や歴史、文化に根差した取り組みを通じて、世界に突き抜けた成果を目指すべきだと考えている。

例えば、コウノトリの野生復帰はその象徴だ。1965年に絶滅したコウノトリを自然界に戻す取り組みは、世界でも例がなく、これを実現すれば世界を驚かせると感じた。高さや大きさで競うのではなく、独自の価値を生み出すことが重要だと思い、この取り組みを推進してきた。

また、演劇やアートとの取り組みも同じようなメンタリティが根底にある。物質的な利益や直接的な経済効果ではなく、人々の心を動かす価値を重視している。例えば、コウノトリの飛ぶ姿を見て幸せを感じることや、アートに触れて心が豊かになることは、どちらも人間の内面を支える重要な要素だと考えている。これが地域全体の寛容性や価値観の変化につながるのではないかと感じている。

豊岡市が突出するためには、物質的な価値ではなく、こうした心の豊かさや文化的な価値で勝負することが必要だと思う。この構えがあったからこそ、世界とのつながりを築けたのではないかと考えている。

具体的な成果を追求する際には、目標を明確に設定することも重要だ。例えば、コウノトリの野生復帰では飛び立つ個体数、農法では作付け面積、インバウンドでは訪問者数など、定量的な目標を定め、それに向けて進めている。こうした明確な目標を持つことで、取り組みを具体化し、実現に向けて進めている。

来年、豊岡市の大学から初めての卒業生が出るが、豊岡に残る学生は数人にとどまる。特に演劇系を選んだ学生が多く残る傾向がある。大企業に入りキャリアを積むよりも、自分たちで演劇活動を続けたいという学生が目立つ。彼らは「演劇で儲けるなら大都会に持つていけばいいが、創作環境としては地方の方が優れている」と考えている。

例えば、豊岡市のアートセンターでは24時間稽古が可能で、東京のように抽選で公民館を借りたり、終電で活動を中断したりする必要がない。効率的な創作環境を活かし、豊岡で挑戦を続けようとする学生がいる。現在の3年生には、すでに市の補助を受けてカフェ兼小劇場を作り、将来的にはゲストハウスも併設しようとしている学生もいる。市としては、こうした挑戦を財政的・精神的に支援し、中高生とのつながりも積極的に育んでいく。

私自身、現役時代に毎年豊岡市内の17の中学校・高校すべてを回り、1時間の授業を行ってきた。授業では豊岡の可能性や課題について話し、生徒たちと議論を交わした。そして、「広い世界を見てきた後、何人かは戻ってきてバトンを受け継いでほしい」と伝え続けてきた。このように、中高生にまちの希望を伝え、将来のまちづくりを担ってもらう意識を育てることにも力を入れてきた。

司会:学生はその授業に対してどういう反応だったか？

中貝:学生たちの反応は学校や年度によってさまざまだが、例えば「豊岡にはセブンイレブンがないが誘致しないのか」といった質問が定番で出ることがある。それに対して「それは人生にとって大切なことか」と問いかけると、笑いが起きるクラスもあれば、真剣に「大切なことだ」と答える生徒もいる。

特に印象的だったのは、山間部の中学校の女子生徒が「市長にとって但東は大切ですか」と直接的に質問してきた場面だった。私は「遠くから見える城崎をまず売り込み、訪れた人に但東の良さを知ってもらう戦略を取っている」と答えたが、自分でも論理的な大人の答えに感じ、心に曇りが残った。後日、その生徒が感想文で「市長の答えに納得し、自分は但東を世界に発信したい」と書いていたと聞き、大変感動した。また、その質問を聞いた別の生徒も共感と納得を示しており、子どもたちには思いが伝わっていたと感じた。

重要なのは、子どもたちを子ども扱いせず、全力で向き合う姿勢だと思う。その姿勢が信頼を生み、心に響くのだと実感している。

もう一つ印象深い事例として、コウノトリの野生復帰に感動した女子高生が、大学進学を諦め豊岡市役所に就職し、コウノトリに関わる仕事を続けている話がある。彼女はその後大学院に進み、博士課程で研究を続けている。このように、大人が全力で取り組む姿勢が

若者を突き動かし、エネルギーを与えるのだと思う。

全力で向き合うことが、まちづくりや次世代への繋がりを生む基本ではないかと改めて感じている。

竹原:富岡町は震災からの復興を模索している最中であり、ご紹介いただいた豊岡市の例には大変感銘を受けた。原発被災地で何が必要かを考える中で、国はF-REIといった取り組みを進めているが、どうしても外部からの人材に頼る形になりがちだと感じている。

この地を本当に取り戻すためには、自分たちの力、人材の育成が欠かせないと思う。中貝先生の苦労された経験から学びながら、私たちも1つ1つ努力を重ねていきたいと強く感じた。また、株式会社ふたばの遠藤社長のように、この地で生まれ、この地を愛する人々とともに、地域を守り続ける取り組みを進めていきたいと思う。

中貝:今日話題に出さなかつたが、城崎は1925年の北但大震災で壊滅的な被害を受け、480人以上が命を失った。そこからの復興では、町民大会を100回以上開き、町長を会長に各区から最低1人を参加させて、「町をどう復興するか」というコンセプトや具体策について徹底的に議論した。そして、最終的に全会一致で「木造の町並みを復元する」という方針を決定した。

当時、関東大震災の影響もあり、兵庫県は洋風建築での復興を提案したが、城崎はこれを撤回させ、町の要所に鉄筋コンクリート建築を取り入れつつ、全体としては伝統的な木造の町並みを復元した。また、用地の無償提供や土地区画整理を活用し、川幅や道路幅を広げ、周辺の山を削って地盤を上げることで水害対策も行った。このような復興プロセスは非常に民主的であり、現在の城崎の魅力の源泉となっている。

こうした復興の過程で、「外部の知恵を取り入れつつも、地域内で議論し納得する」という姿勢が大きな力となった。副町長が言及した「外部との共有が不足している部分」についても、町内で議論を深め、知恵を結集させていくことが重要だと感じる。城崎の事例を振り返りながら、現状に応用できる知見を共有したいと思った次第だ。

【付記】

2024年12月21日付けメール

早稲田大学ふくしま浜通り未来創造リサーチセンター
第16回創造的復興研究会 関係の皆様

12月18日（水）18:00-20:10に開催した第16回創造的復興研究会「大学は町を変えるか：芸術文化観光専門職大学を例として」には、研究会メンバーなど27名の皆さんに参加いたしました。福島復興における高等教育機関の重要性や必要性について議論しました。

講師としてお迎えした中貝宗治さん（前豊岡市長）には、「小さな世界都市（Local & Global City）」の形成に向けた兵庫県豊岡市の持続的な「まちづくり」と高等教育機関（兵庫県公立大学法人・芸術文化観光専門職大学）の創設について、大変刺激的な講演をいただき、誠にありがとうございました。

兵庫県豊岡市は私が18才まで暮らした故郷で、中貝さんは私の卒業した高校（兵庫県立豊岡高校）の2年先輩です。故郷を遠く離れて半世紀、わが故郷（豊岡市）がかくも素晴らしい「まちづくり」を展開してきていることに、改めて驚愕しました。

コウノトリの野生復帰の話（コウノトリも住める豊かな環境づくり）、北丹大震災（1925年）からの城崎温泉の復興の話（震災前の木造三階建の歴史的町並みの復元）、深さを持った演劇のまちづくりの話（学校教育における演劇を活用したコミュニケーション能力の育成）など、それぞれが「まちづくり」として一級品です。

しかし、福島の復興と廃炉に14年間取り組んできた社会科学者としては、以下の中貝さん4つの言葉が福島復興にとってとても大切だと感じました。

1. 目先のことだけや、いま住んでいる人への対応だけでなく、少し遠い未来を考えた突き抜けた面白い「まちづくり」に挑戦する
2. 突出した大学を創り、挑戦する若者を支援する
3. 若者に選ばれる、特に若い女性に選ばれる突き抜けた「まち」の価値（魅力）の創造
4. 小さな「まち」でも直接世界と結びつくことが可能

中貝さんが何回も強調していた、考える軸は「深さ」と「広がり」であるということ、もう一度、深く広く考えたいと思います。

改めて、中貝さん、司会の林さん、討論者の山本・富岡町長、竹原・富岡副町長、遠藤さん、工藤さん、参加の皆様、誠にありがとうございました。

なお、中貝さんの講演の詳しいところは中貝さんのご著書『なぜ豊岡は世界に注目されるのか』集英社新書、2023年をご覧ください。

引き続きよろしくお願ひします。

創造的復興研究会・代表
早稲田大学 松岡 俊二

(以上)